なる眞宗東派西方寺の住持。一名堅正。哲僧の門に學び、後寮司となつた。明治二十年六月十九日寂。四十三歳。法諡華德院。

ハヤシュ　林瑜　字は孚尹、通稱を周輔といひ、蓁坡と號する。實は澁谷亮の次子で、俸十人扶持を受けたが、林翼の家に養はれて寛政九年その後を襲ぎ、文化三年十人扶持を加へ、文政二年新知百二十石を受け、十一年五十石を增し、その職は明倫堂助教から進んで藩侯の侍讀を兼ねた。瑜の詩は平淡で、而も間々雅典のものがあり、文亦見るべきものが多い。傍ら南宗の文人畫を能くした。天保七年八月歿、年五十六。著す所晚晴閣百絕・梧窻詩話・僅中集は已に世に刊行せられ、正學旨歸・詩小撮・尙書通讀・讀朱要語・螢窻漫筆は皆家に藏した。瑜又文政五年初めて明の洪自誠著す所の菜根譚を上木し、これを同志に公にして傳寫の勞を省いた。

ハヤショク　林翼　通稱慶助、諱は翼、字は師馮・柏堂・屋山はその號、金澤の人である。父は賈人長兵衞富則。延享元年を以て生まれ、初め澁谷亮に就いて學び、又京に入つて一時の名流に從遊した。寛政二年藩老今枝易道に師禮を以て迎へられ、四年明倫堂の起るや讀師に任じ、七年俸二十人扶持を得て助教に昇り、九年五月廿七日歿した。翼病革るの時その著書を悉く丙丁に附した。弊帚集は後に次子景任の刻せしめたものである。

ハヤシロクロウノヤカタ　林六郎の館　加賀古跡考に、石川郡倉ヶ嶽の麓に同名の村があるが、山は知氣寺村領で、古へ林六郎の城跡があり、又知氣寺の内には林六郎屋敷跡といふ平地もあると記され、寶永誌には日御子村六郎ヶ畠といふ所にその塚があるとも記される。しかし是等の六郎が寶永二年木曾義仲に屬した林光明のことか否かは判らない。

ハヤビキヤク　早飛脚　→ハヤミチヒキヤク　早道飛脚。

ハヤブネキヨウゲン　早船狂言　珠洲郡蛸島の高倉彦神社では、陽曆九月十一日の祭禮に神輿巡幸を行ひ、終りて早船狂言を催す。數多の人形を乘せた朱塗の船を拜殿に引出し、船頭及び舟子に擬したる二人が、他の若者の操る船體の動搖に伴うて、解纜出港に關し節面白く問答し、それを早船狂言と名づける。

ハヤマツ　早松　能美郡今江にあつた。寛文元年前田綱紀が淺井畷の戰場を巡視した際の書上に『八月九日辰の刻今江領之内早松の東に而、丹羽五郎左衞門殿家老江口石見守与御合戰、兩方之御入數手負討死夥し。』とある。能美名蹟誌に、今江村におうご宮・一宮・おいは宮・石宮・早松宮・中ノ堂・野宮の七社があるとする早松宮是である。

ハヤマツミヨウジン　早松明神　→サラノミヤ　佐羅宮。

ハヤミチヒキヤク　早道飛脚　早道飛脚足輕ともいふ。萬治二年六月の規定によると、金澤から江戸に達する早道飛脚は、夏期に六十時、冬期に七十二時を要するを早飛脚とし、夏は八十四時、冬は百八時を要するを中飛脚とし、夏は百二十時、冬は百四十四時を要するを常飛脚とした。又京都に往くには、夏二十七時冬三十六時を早飛脚、夏三十九時冬五十一時を中飛脚、夏六十時冬七十二時を要するを常飛脚とし、各路銀を異にした。早飛脚・中飛脚共に規定の時間より早く達する時は賞賜せられ、早飛脚・中飛脚・常飛脚共に規定時間より遲れる時は路銀を減ぜられた。こゝに夏といふは、三月朔日より八月晦日まで、冬といふのは九月朔日から二月晦日までであつた。早道飛脚は元來藩の足輕であつたが、後には町飛脚を使用した。

ハヤミチマチ　早道町　金澤の町名。枝町の上で、新竪町の裏町である。藩政の頃は此の地に早道と稱して飛脚用を勤める足輕の邸地であつたからこの名を呼ぶ。其の頃は戸數も僅かであつたが、後追々諸組付足輕の組地となつたのである。

ハヤミヅヨシナリ　早水嘉生　大聖寺の人。父を亮信というた。號は淵水。醫を竹内某に學び、後京に出でゝ皆川淇園に學び、天明中歸りて醫を以て藩に仕へ、屢江戸に往來した。嘉生人と爲り恭謹溫厚、學經史百家に亙つた。享和二年四月廿七日歿、齡五十五。

ハラ　原　能美郡輕海郷に屬する部落。源平盛衰記安元三年白山神輿振の條に、佛ヶ原金劍宮といひ、廻國雜記に佛の原とあるもこの地である。

ハラ　原　河北郡河村郷に屬する部落。

ハラ　原　羽咋郡邑知院内志雄庄に屬する部落。

ハラ　原　羽咋郡本江の内の小字。

ハラ　原　鳳至郡本郷に屬する部落。原はもと隣村荒屋の内であつた。

ハライシ　原石　鳳至郡原に產する石材。輝石安山岩質凝灰岩で、黝色の安山岩質石基中に、白色及び黑色の砂礫を含み、質は硬い。

ハラカゼ　原風　三州名跡志に、能美郡原村で婦人臨產の時、その家の窓戸を鎖し置くことが昔からの慣習である。若しその儘開き置けば、村の產土神の咎で風が起ると記する。原風といふもの是である。

ハラガハ　原川　能美郡原（部落名）を流れる。水源は中峠領山で、一二粁程流れ、中領で梯川に落合ふ。

ハラガハ　原川　鳳至郡原領山から流出し、地原領で八ヶ川に落合ふ。水源から落合まで三粁餘。

ハラキチエモン　原吉右衞門　初めて前田利家に仕へ、祿次第に加へて千石に至つた。子孫數家に分かれて藩に世襲する。

ハラクザエモン　原九左衞門　初め前田利秀に仕へ、後利家に臣事して祿三百石を受けた。元和三年歿。その子孫藩に世襲する。

ハラゴサン　原吳山　通稱與三兵衞。文久以降卯辰山麓谷に陶窯を築いて樂燒を製した。明治三十年歿、歳七十一。

ハラゴゼン　原御前　羽咋郡原村の東に在つて高さ三四二米。一に赤倉山ともいひ、その頂上に石を建てゝ祀つてある。→ホングウアカクラジンジャ　本宮赤倉神社。

ハラサブロザエモン　原三郎左衞門　三郎左衞門は杉山市丞の子で、原太左衞門の養子であつたが、三十人頭となつて祿百三十石を受けて居た爲、父の遺跡百二十石を繼ぐことを得ぬ筈であつた。然るに太左衞門歿後、前田利常はその前祿を三郎左衞門に加へたので、三郎左衞門は侯の厚遇に感じ、萬治元年利常の薨後小松國松寺に於いて之に殉じて屠腹した。享年五十。この末孫原他四郎元甫の時、明和二年罪を獲て家斷絕した。